国際看護研究会　ＮＥＷＳＬＥＴＴＥＲ　No.21

Japanese　Society　for　International　Nursing

2001.4.15 発行

国際看護研究会も発足 5 年を迎えました。皆様のご協力を頂きながら、定例研究会、学術集会、スタディツアー等開催していくなかで、着実に国際看護の発展を目指す者の輪が拡大しているのを実感します。今後も更なる前進をしてまいりたいと思います。

本号の内容は以下のとおりです。

Ⅰ.運営委員会報告 …… p.1
Ⅱ.ワーキンググループ報告 …… p.1
Ⅲ.第 20 回国際看護研究会報告 …… p.2
Ⅳ.第 21 回国際看護研究会のお知らせ …… p.6
Ⅴ.国際看護研究会第4回学術集会のご案内 …… p.6
Ⅵ.海外情報 …… p.7
Ⅶ.皆様へのお願い・お知らせ（事務局より） …… p.11

Ⅰ．運営委員会報告

第 19 回運営委員会以降、特に運営委員会は開催されなかったが、研究会として以下について実施した。

1. 会員名簿の発送

   2001 年 1 月に、昨年度会費納入済みの会員に対し、会員名簿を発送した。

2. 第 2 回スタディーツアーの実施

   2001 年 3 月 25 日～31 日の 7 日間の日程で、カンボジアへのスタディツアーを実施した。参加者は 13 名（うち学生 6 名）であった。保健医療施設、ＪＩＣＡプロジェクト、ＮＧＯ視察等により現場での活動に直接触れることで、各参加者が様々な刺激をうけ意義あるツアーとなった。

3. 国際看護研究会第４回学術集会　実行委員会の開催

   丹野かほる学術集会会長の下、第 1 回実行委員会が 2 月 10 日、第 2 回が 4 月 7 日に開催された。今後の準備作業の流れ、各委員の役割分担等の決定や案内状発送などの作業をおこなった。

Ⅱ．ワーキンググループ報告

前回以降、ワーキンググループとしての活動はなかった。

Ⅲ．第 20 回国際看護研究会報告

（2001 年 3 月 10 日国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センターにて開催）

第 20 回国際看護研究会は、三重県立看護大学学長で本会の顧問でもある前原澄子先生をお迎えし、中東の女性の活動についてご講演いただいた。

抄録

「中東の女性の活動」

三重県立看護大学学長/国際看護研究会顧問
前原　　澄子

中東訪問の経緯

2000 年 2 月に、第 6 回「女性と健康」交流プログラムで中東 3 国を訪問した。このプログラムは、1993 年にヨルダンのバスマ王女、1995 年に同ハッサン皇太子が訪日されたときに日本女性と交流を持ちたいとご希望されたことで始まったものである。計画は外務省の中近東課が行い市川房江記念会と国連 NGO 国内婦人委員会をもとに発足した交流で、1997 年にエジプト、1999 年にパレスチナが加わり女性の交流を図っている。今回の訪問は日本看護協会が主な世話役となり、国連 NGO 国内婦人委員会の委員長である中村道子氏を団長とし、日本看護協会南裕子会長と岡谷恵子常任理事（現：専務理事）、および日本女性法律家協会副会長である柳川恒子氏とともに専門家の立場で参加した。

Ⅰ.ヨルダン

1.ヨルダンの人口動態

外務省のデータによると、人口増加率が 4.1%、移民・帰国者を除いた自然増加率も 2.8%と高い。このまま推移すると 2011 年には現人口の 430 万人の倍になるであろうと予想されている。15 歳以下の人口比率は減少傾向にあるが、29 歳以下の人口比率は 75%と高く、雇用問題にも配慮が必要という事情がある。人口は都市部集中に変調しており、居住率は urban area に 77%、rural area に 20%、残りが砂漠地方である。乳幼児死亡率が改善し、出生率も徐々に減少の傾向にあり、また死亡率が減少し平均寿命が延びている（表１）。また、若年者が減り高齢者が増える傾向にある。主な死亡原因は 1 位が循環器疾患で圧倒的に多く、2 位が肺炎となっている（表 2)。避妊の実行は IUD が最も多い。(表 3)

2.ヨルダンの保健医療体制

保健省（国)、王立サービス機関、ヨルダン大学付属病院、民間病院、国連パレスチナ難民救済軍事機関の 5 つの部署で構成されている。医師数は人口１万人当たりの数は日本と同程度の比率だが、看護婦が少なく日本の約５分の１程度である（表 4)。

3.ヨルダンの保健医療政策

予防医療を最優先している。次いで地域社会に影響を与える公共機関の利用、１次医療（PHC）の質の向上、保健省の役割の明確化、低所得者層を考慮して医療費・健康保険費の改定、薬剤の安定供給・大災害や緊急事態時の適切な備蓄のための医療政策の改定、人口の抑制を挙げている。

4.ヨルダンでの訪問（2000.2.11､12､13）

１）ヨルダン女性総連盟

国内に 11 の支部を持ち、人権問題・女性の健康問題への取り組みのほか、老人ケアのトレーニングコースを開催している。連盟本部では、女性の経済的自立を支援し、最近ではローンの貸付により女性がビジネスを始めることを奨励する活動も始めた。現在社会的問題になってきた子供の虐待にも取り組み、アクティビティープログラムとして結婚前のカウンセリング・性教育・家族計画指導、ワークショップの開催も行っている。

２）アイン・アル・パシャ診療所

地域の診療所として 1988 年に設立され､約 20 万人の地域住民を利用対象としており、あらゆる診療科に対応している。女性の健康に関しては病気の治療だけでなく、家族計画相談、妊娠中のケア指導、子宮癌検診、更年期障害、骨粗しょう症などの予防にも対処している。女性は宗教的・文化的な慣習により、診療を受け入れないことが多かったため、指導により受診できるよう努力してきた経緯がある。１人の女性の出産回数が多く、女性の健康を考慮し NGO が子供の成長を支援する優秀な人材育成を行っている。

３）パス・ファンダ・クリニック

陸軍が運営しているヘルスケアセンターであり、地域の女性 10 人位を対象に月 4 回、家族計画についての教育指導を行っている。教育を受けた女性達がそれぞれの地域で他の女性達を指導するという組織的な家族計画を広げている。女性が食べ物や軍のユニフォームを生産して販売し、収入を得るということもサポートしている。

４）キング゛・フセイン医療センター

ヨルダンで最大の総合病院で、外来患者 2000 人／日、職員数 1000 人以上を有し、高次医療も機能している。教育病院として医療従事者の教育訓練も行っており、看護婦については９ヶ月間の熱傷・小児・リハビリテーション・脊髄損傷のスペシャリスト養成コースを設けている。

５）プリンセス・ムナ看護学校

学士を取得でき、学生は卒業後８年間軍関係の病院で働くという義務がある。看護教員はいるものの医師による医学モデルでの看護教育という印象であった。

６）ラーニア・アル・アブドッラー王妃拝謁

王妃は女性問題に関心があり、レイプを受けた、あるいは不倫を働いた女性は直ちに親族によって殺されてもその親族は罰せられないという現行の法律を無くすための活動をサポートされている。

Ⅱ.パレスチナ

外務省からはパレスチナに関するデータの入手ができなかった。

1.パレスチナでの訪問（2000.2.14）

１）パレスチナ女性向上委員会

女性の進出を促進し、パレスチナにおける女性の地位の向上、国の発展を目的とし活躍している。パレスチナの女性は、女性の権利の主張と伝統的な女性としてのあり方の間で葛藤があるといわれ、社会における男女間での差を調査してデータをまとめ、伝統的な女性を教育して改善していくための活動を行っている。

２）NGO 女性団体

NGO 会館では女性を自立させるための訓練を行い、得た収入を団体の活動資金にしている。ある NGO では女性が手に職を付け自立するために、秘書や看護婦を養成しており、働く女性のための保育所も持っている。

Ⅲ.エジプト

1.エジプトの人口動態

北アフリカ地域で第 1 位の人口を有し、平均寿命は男性 60 歳、女性 63 歳で延びつつある。最近 10 年間の傾向では出生率・死亡率も減少しており、新生児死亡率は著しい改善が見られているが（表 5)、疾病構造において妊娠合併症が非常に高い（表 6)。避妊の実行は IUD、ピルが多い（表 7)。

2.エジプトの保健医療体制

人口１万人に対しての医師の割合は発展途上国の中では多いとされているが、医師と呼ぶ範囲の決め方が様々なため信憑性は低い。医師の数が地域的に片寄りがあるのも問題とされている。看護婦の地位は低く、今後看護婦の資格向上が課題とされている（表 8)。助産・避妊指導などを行っている TBA（Traditional Birth Attendant 伝統的助産婦）は無資格であり、女性の健康問題、特に妊娠分娩による疾患の罹患率や妊産婦死亡率の高さに関与していると考えられている。今後、TBA に教育を施し存続させていく方針である。

2.エジプトにおける保健医療計画

５ヵ年計画に基づいて策定されており、1992～1996 年の第３次計画は、地方の保健医療サービスの拡充（特に感染症・結核の抑制対策)、低所得者層への無料診療の拡充、母子センターの増設、公的医療施設の拡充、医療要員の養成施設の増設、国内の医薬品生産力の拡大、医療保険制度の整備拡大であった。循環器・呼吸器・感染症寄生虫症が大きな疾病構造の重大な部分を占めているので環境衛生や予防医学の普及が大きな問題となっている。また特に母子の問題が重要で、灰白髄炎・新生児破傷風の撲滅、産前産後の罹患率・死亡率を低下させる政策を挙げている。

3.エジプトでの訪問（2000.2.15､16､17）

１）ナセル研究所の女性保健センター

３年前に中東初の女性のための保健センターとして設立され、既婚女性と高齢女性の健

診が中心であるが、メンタルヘルスにも力を入れカウンセリングも実施している。

２）国家女性会議

大統領直轄の国家女性会議は、あらゆるところに女性の発展を促進させ、今までの誤った女性に対する見方を正当化して、女性のエンパワメントを果たしていくことを主たる目的とし、大統領夫人が委員長をつとめ、有能な女性 30 名が委員として参画している。大統領へ直接提案でき、さらに政策に反映させることができるという仕組みができている。

３）社会開発基金

湾岸戦争後に、年間 5 万人という失業者が出たため、その解決策として設立された。人材の教育訓練、特に女性と若者に労働の機会を提供するという大きな目的があり、政府とは独立した予算で 5 年毎に事業計画を立てて援助している。

４）NCCM(National Council of Child and Mother)

母子の問題を取り扱っている NGO の会議団体を訪れ日本とエジプトの母子に関する健康問題を討論しあった。

５）サッカラ女性開発プロジェクト

サッカラという農村に暮らす女性と子供を支援するという、女性開発のための総合プロジェクトで、識字・計算の教育活動や、仕事の機会と収入を与えている。

NGO を組織し、草の根的活動を通して女性の権利・力を主張し、女性の幸せの為に健康問題はもとよりさまざまな問題に対して解決に向けて働いている女性たちを見て感激した。王妃・大統領夫人が女性の活動に率先して参加しているのが印象的であった。

また、中東訪問での経験を今後の活動に役立てていかなければならないという思いを強くした旅であった。　（文責：伊藤尚子）

（図表省略）

Ⅳ．第 21 回国際看護研究会のお知らせ

日　時：2001 年 6 月 23 日（土）　13：00～15：00

会　場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター

講　師：高田恵子、柳澤理子、森 淑江

テーマ：「ウズベキスタンにおける看護協力」

1999 年に国際看護交流協会の調査団団員として本研究会会員の高田が、2000 年、2001 年に JICA 専門家として運営委員の柳沢、森が派遣されている。看護分野における国際協力のケーススステディとして、この一連の活動について講演を予定している。

Ⅴ.国際看護研究会第 4 回学術集会のご案内

会員の皆様のお手元には、既に学術集会のご案内が届いていることと思いますが、以下の日程で開催します。毎年、さまざまな活動報告や研究成果などが発表されています。ぜひ会員の皆様の多数のご発表・ご参加をお待ちしております。

日　時：2001 年 9 月 8 日（土）　9：30～17：00

会　場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター

プログラム：基調講演　　学術集会会長　丹野かほる

（前厚生労働省健康局国立病院部政策医療課）

一般演題（口演）

参加費：会 員 2000 円（学生 1000 円）

非会員 3000 円（学生 1500 円）

参加費には抄録代が含まれています。

演題募集要領：テーマは国際看護に関する研究、または実践報告です。申し込み締切りは 7 月 13 日（金）です。詳しくは下記までお問い合わせください。

問合せ先：　〒371-8514　　群馬県前橋市昭和町 3-39-5

群馬大学医学部保健学科　森 淑江

電話／FAX　027-220-8924

E-Mail: myoshie@health.gunma-u.ac.jp

＊お願い：本学術集会は皆様の参加費により開催しておりますが，毎回財政的に大変厳しい状況です。そこで今回は学術集会への寄付を一口 1000 円で　受け付けることに致しました。皆様のご理解とご協力をお願いします。

振込み先は、学術集会の口座へお願いいたします。

口座番号　００２６０－１　２９４３１　　国際看護研究会学術集会

通信欄に「寄付」とお書きください。

Ⅵ. 海外情報　―　カンボジアスタディツアーに参加してー

カンボジア・スタディツアー旅行記

三重県立看護大学３年　　坂田　一予　　西川　美和

私たちは、途上国における看護・医療・保健プロジェクトの現場を実際に視察し、看護における国際協力の実状を知りたいという思いから、今回このスタディツアーに参加しました。当初考えていた以上に、カンボジアの歴史や文化、保健や医療の現状、国際協力の実状など、多くの貴重な体験をすることができました。これからそのスタディツアーの様子をお話ししたいと思います。

今回の参加者は、現地で合流された先生を含め、教員７名、看護学生６名の計１３名で、３月２５日から３１日の日程でした。成田と関空よりそれぞれ出発し、バンコクにて合流した後、プノンペンへと到着しました。

●3 月 26 日　ーJICA 母子保健プロジェクト視察とトゥール・スレン博物館見学ー

午前中は、妊産婦死亡率の減少を目標とするプロジェクトの視察のために、1997 年に日本の無償資金援助で建てられた母子保健センターを訪れました。明るくて開放的な建物で、３次医療の場であるこのセンターでは、新しい制度が採用されており、各受診科窓口での患者登録や受診料の支払い（prepaid 制度)、妊産婦検診、母親学級の様子等を見学しました。本来の病院の機能や医療従事者の意識を働かせることが大変であったという話や、まだまだカンボジアでは、看護は家族の仕事であるという話が印象的でした。

午後は、トゥール・スレン博物館を見学しました。1975 年 4 月から 1979 年 1 月まで、3 年 8 ケ月に及んだポル・ポト政権下では無謀な社会主義革命が強行されました。粛清の舞台のひとつが当時「S21」とよばれたトゥール・スレン刑務所で、学校を改造して造られたそうです。現在ではポル・ポト派の残虐行為を伝える博物館として公開されています。ここは、なぜカンボジア国民にとって、この時代が、「精神的外傷」として現在でも記憶に深く刻み込まれているのかを知ることができるところです。薄暗い部屋にあるベッドやトイレ代わりの箱、実際に収容された人たちの写真や衣服、生き残った人が描いた収容所の様子の絵画、敷地の至る所にはりめぐらされた鉄条網等、背筋がぞっとするような光景でした。

●3 月 27 日　ーWorld　Vision 視察と JICA 結核プロジェクト視察ー

午前中は、World　Vision（キリスト教を基礎とする国際 NGO）の HIV／AIDS プロジェクトと Child　Survival プロジェクトをグループに分かれて視察しました。私たちは、HIV／AIDS プロジェクトに参加し、AIDS 患者の方のご自宅を訪問しました。もう３日も前から意識がなく家族や近所の人に見守られながらの患者、病気になりお金やめぼしい家財道具もなく、家族も去ってしまいどうしたらいいのかわからないと私たちの前で泣き出してしまう患者、軍人だったご主人が病気になり、今は何不自由ない生活ぶりがみうけられるが、生まれたばかりの子どもを抱える家族。そのような患者や家族を前に、私たちはた

だ立ちつくすだけでした。何かしなければならない、私たちに何ができるのだろうと今は自分に問いかけています。

午後は、JICA の結核プロジェクトを視察しました。カンボジアは結核の多い国で、その結核対策の中心である国立結核センターを訪れました。このプロジェクトは、センターに対する支援だけでなく、短期化学療法（DOTS）の推進など、全国の結核対策をも支援しています。安易な考えによるお金や薬の援助で、薬剤耐性菌結核が増えてしまったというお話を聞き、正しい支援の方法を選択しなければならないことを痛感しました。

●3 月 28 日　－SHARE プロジェクト視察－

SHARE（シェア＝国際保健協力市民の会）は、日本の保健医療 NGO で、カンボジアの農村において地域保健プロジェクトを行っています。プノンペンから 40 キロほど離れたコンポンチャム県スレイセントー郡のプロジェクト地を訪問しました。メコン川を船で渡り、バイクタクシーとトラックとその荷台に分かれて乗車し、TBA（伝統産婆）へのトレーニングの様子を、実際に TBA のご自宅に伺って見学しました。伝統の中にいかに現代の知識や技術を取り入れいくか、その難しさを感じました。しかし、繰り返し根気よくトレーニングする様子やアットホームな雰囲気ながらも真剣に学ぼうとする TBA の姿勢をみることができました。

●3 月 29 日・30 日　－トレサップ湖クルーズとアンコール遺跡群の見学－

シムリアップは、アンコール遺跡群が大小 100 以上あるといわれている文化遺産あふれる町です。遺跡を訪れるたびに笛やカウベルなど、お土産を売る子どもたちのたくましい姿に出会いました。町に到着後、まず船でトレサップ湖を訪れました。東南アジア最大の湖で、海を思わせるような広さです。乾季では、水深２ｍほどですが、雨期になると１０ｍにもなるそうです。魚の宝庫でもあり、クメール人をはじめ、ベトナム人、チャム人など多彩な人々が、漁業を営みながら水上生活を送っています。学校も家も雑貨屋も美容院もすべて水の上にあって、移動することができます。

その後、アンコール・ワットを訪れました。世界遺産の１つで、12 世紀後半にスールヤヴァルマン２世によって造られたヒンドゥー教の寺院です。回廊の見事なレリーフ、上ることを拒否するかのような急勾配の中央祠堂への階段、５つの塔に囲まれた中央祠堂、像が通るために設けられた門など見るものすべてが感動でした。像の背にゆられて登ったプノンバケン山からは、樹海に浮かぶアンコール・ワットを望むことができ、その後、真っ赤な太陽が西のジャングルに沈んでいく雄大でドラマチックな瞬間を見ることができました。翌日は、バイクタクシーに乗って、アンコール・ワットの朝日を見に行きました。西の参道から見た朝日は、中央塔を含んだ全体像がシルエットとして浮かび上がり、時間とともに空の色が変わり、感動的で神聖な雰囲気に包まれました。

その後、高さ 8mの城壁に囲まれているアンコール・トムやその中央にあるバイヨン、王族たちが閲兵を行った王宮前にある象のテラス、もと僧院だったタ・ソム、治水に対する信仰と技術を象徴する寺院であるニャック・ポアン、自然の力を明らかにするために、樹木の除去や本格的な積み直しなど修復の手を下さないまま据え置かれているタ・プローム

等を駆け足で回りました。昼食後、シムリアップの町と別れを告げ、再びプノンペンへとプレジデントエアラインで戻りバンコクを経由して帰国の途につきました。

●スタディー・ツアーを終えて

プノンペンの町は、行き交う人やバイクタクシー、シクロ、自動車、物の活気が一杯で、南国の強烈な日差しに負けないくらいに、エネルギーに満ちあふれていました。その反面、地雷で犠牲になった人の私たちに差し出す帽子や手のひら、外が真っ暗になっても、小さな子どもが子守をしながら道ばたに佇む光景やホテルの前に横たわる母子に胸が熱くなりました。また、視察で出会った悲しみに暮れるAIDS患者に何もできない自分たちがただ腹立たしく、情けなくなりました。現地で生き生きと働き、カンボジアにすっかり溶け込んでいる多くスタッフを眩しく思い、また再び私たちも必ずこのカンボジアの地を踏みたいと思いました。シムリアップの町では、ジャングルが切り開かれ、整備されつつある遺跡群に少しがっかりしたり、反対に遺跡の素晴らしさに感動しました。土産物を売る子どもたちの笑顔をたくましく感じると同時に、疑問も感じました。これらは、日本にいては決して感じることができない、考えることができないことばかりです。私たち学生に今できることをこれからじっくりと考え、実行し、そしていつの日か、看護の国際協力の場で役に立つ人間になりたいと思っています。

最後に、多くの学びや思い出、出会いを得ることができたこのスタディツアーを企画し、参加する機会を与えてくださった国際看護研究会の皆様とスタディツアー参加者の皆様に感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

カンボジアスタディーツアー

宮崎県立看護大学３年　谷口孝英

私は、国際看護研究会によるカンボジアスタディーツアーに参加しました。外国の保健事業や海外旅行は私にとって初めての体験であり、出発の日が近づくたびに興奮が大きいものとなっていきました。ツアーに参加する前に、パスポートの取得や通貨の両替などもおこないました。それらを手にするたびにこれからの体験を想像しました。

そして、いよいよ出発の日がやってきました。私は、同大学の大名門先生と一緒に宮崎から関西空港まで電車で行くことにしていました。関西空港に集合する前の日の夕方に電車に乗ったのですが、その電車は大分で止まってしまったのです。広島県で震度６程度の地震があり、電車の運転をみあわせているというのです。私は、これは夢だ、と思わずにはいられませんでした。心待ちにしていた旅行が終わってしまった、と半ば放心状態だったのですが、同行の先生の助けもあり、気持ちの乱れを抑えることができました。朝まで

新幹線の中で過ごし、考えながら機敏に行動し急きょ福岡空港から関西空港行き、集合時間を１５分遅れてしまったのですが、なんとか間に合うことができました。このようにして、スタディーツアーは始まったのです。

保健事業の視察としてJICA母子保健プロジェクトに参加しました。エコーや子宮底長の測定などの妊婦の診察や妊娠中毒症の予防や症状を話して妊婦の安全な出産にむけて活動しているのを見学することかできました。診察代は貧困の場合、削減や免除が行われていました。また、２階は入院患者がいたのですが、そこにナースの姿はなく、家族が患者のケアを行っていました。ここでは、ナースによる看護というものが存在しないことを知りました。

次に、World VisionのChild Survivalプロジェクトに参加しました。舗装されていない道路に揺られて村へ行き、村の妊婦の健康診断やマラリアなどの予防接種を行っているのを見学しました。このときは、英語かクメール語しか通じなかったので、どちらも話せない私は沈黙が多くなってしまいました。言葉が通じないことの苦しみなどを痛烈に実感できた時間でした。

また、結核プロジェクトにも参加しました。エイズに伴った結核発病者が多いことを知りました。ここでは、結核感染の検査や治療のために力を注いでいくそうです。結核プロジェクトとは関係ないのですが、ここで飲み物として、ヤシの実が配られました。テレビで芸能人がおいしそうにヤシの実にストローを挿して飲んでいるのを見て、私も飲みたいと思ったことがあったのですが、その夢がこの日叶いました。結核プロジェクトとヤシの実か忘れられない思い出となりました。

そして、Shareの母子保健事業に参加しました。村の産婆さんに妊婦を病院に連れて行く必要がある症状を説明したり、妊婦に必要な食事を指導していました。これらの話は人家で行われました。家は、日本でいうと一階を車庫にしているような建物で、木と竹でできています。人は二階で生活し、このときは２５名ほどの人が集まったのですが、家はびくともせず頑丈に造られていました。村まで来るのに車とバイクできたのですが、バイクにはヘルメットをかぶらないし、道は舗装されてなくてデコボコ道もありました。転倒しそうで怖さもあったけど、すごく新鮮な体験をすることができました。

ツアーでは、観光としてツールスレン虐殺博物館を見学しました。捕虜は、足を伸ばして寝ることもできない狭い場所に収容させられました。捕虜の中には、小さい子どもや女性もいました。無残な尋問や虐殺が行われている絵が展示されてあるのを見て人間のもつ残酷さを知ると同時に、このようなことは二度とあってはならないと思いました。

また、アンコールワットも見学しました。ただただ、建築物の大きさと彫刻の見事さに圧倒され、驚きと感動の連続でした。

ツアー前日の地震以外は無事に過ぎたのですが、最終日に不幸が訪れました。私は、食べ過ぎと疲労により嘔吐と下痢を起こしてしまったのです。最終日にはアンコールトムなどの観光が予定されていたのですが、私は行けずにベッドに横になっていました。脱水があり、日本に帰るのに体力がいるとのことで病院で点滴をうけることにしました。ホテルの近くの病院に行くと、冷房はなく、汗が流れてきましたが、医師と看護士による治療によってかなり楽になりました。また、柳澤先生をはじめとして一緒に参加した先生や学生に支えられて無事に帰ることができました。

今回のツアーはあっという間に過ぎました。いくらか魂がカンボジアに残ったままのような感じでカンボジアで過ごした日々が忘れられません。ここで得た体験により、看護の視野を日本だけでなく海外にもむけられるようになったし、自分の人生観や世界観も大きく刺激されたツアーだったと思います。

Ⅶ. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より）

１．本号に振込用紙を同封しました。2001 年度（2001 年 4 月～2002 年 3 月）の会費納入をお願いします。本研究会の運営は会員の年会費によって賄われています。封筒の宛名ラベル右下に会員番号とともに（ ）内に納入年度が記載されていますので，ご確認のうえ，未納の方は至急お振り込みください。なお 2000 年度会費未納の会員で本年 6 月末までに 200 年度会費を納入されない場合には会員名簿から削除され，退会扱いとなりますのでご注意ください。

年会費 2000 円 振込先郵便振替 東京 00150－6－121478 国際看護研究会

（学術集会参加費振込先とは別です。ご注意ください）

２．国際看護研究会第 3 回学術集会の抄録の残部があります。ご希望の方はその旨を明記の上，500 円分の切手（80 円までの小額の切手をお願いします）と返送先を書いて 210 円分の切手を貼った（日本国内の場合）A4 サイズの返信用封筒を事務局にお送りください。

３．国際協力に携わる人材募集案内が時々本会事務局に届きます。会員の方には主に電子メールを通じてお届けするようにしておりますが，迅速にお知らせするために，メールアドレス未登録の方で，アドレスをお持ちの方は電子メールにて本会事務局にお知らせ下さい。

４．会員の皆様のご意見，ご希望，投稿原稿をお待ちしています。

……

編集後記：第 90 回看護婦（士）国家試験の合格率は例年に無く厳しいものであった。発表日には卒業生の担任をしていたので厚生省まで足を運んだが、84.１％の結果には耳と目を疑ったほどである。試験では国際看護に関する出題もあり、授業担当者として正解率が

気になったところだが、本校ではほぼ全員正解していたようである。(伊藤)

昨年と同様、他校で国際看護について話す機会を与えられた。昨年の教材に多少手を加え自分の考えを強調できるようにしてみた。自分の一体験を語るのは、常に緊張と不安がつきまとうが、学生達の国際看護に対する前向きな反応が私の支えになっている。(田中)

勤務先の大学に本年度大学院修士課程が開設されることになり，国際看護学を担当することになった。国際看護学のコースをもつ大学院としては日本で 2 つ目であり，間もなく新入生を迎える予定である。これまで JOCV の OG・OB が帰国後に勉強してもう一度国際協力の場に出たいと思っても，適当な教育研究機関がほとんどなかったが，一つの選択肢となるであろう。より良い国際協力のための人材育成の場として充実させてゆきたい。（森）

国際看護研究会連絡先（事務局）／NEWSLETTER 発行元